

「ぴよんぴよんジャンプでお宝ゲット！尚徳とびっ子たい」の学習を通して

米子市立尚徳小学校 中 野 貴 昭

1. はじめに

低学年の体育学習のねらいは、「様々な運動の基礎を培う時期」における「動ける体づくり」である。この単元を通して、身に付けさせたい動き・跳び方（技能）を明確にし、「意味ある運動課題」を考えることが重要である。

本実践の2年生児童は、全体的に体を動かすことが好きな児童が多い。高く跳んだり、遠くに跳んだりすることへの興味・関心は高い。しかし、全体的に高く跳んだり遠くに跳んだりする経験が少なく、運動に対して苦手意識を持っている児童もいる。また、片足や両足でリズムよく跳ぶことが難しい児童の姿も見られる。

そこで、跳の運動遊びの技能を明確にし、単元の中に習得するための時間を確保することで、身に付けさせたい力を確実に獲得させること、その力を使って課題に合った跳び方を考え、児童がかかわり合いながら運動していくことをめざした。

2. 指導の実践

(1) 学習内容の明確化

単元計画の中に「主なねらい」と「核となる学習内容」を明記することによって学習内容の明確化を図った。

(2) 学習過程の工夫

本実践では単元前半に「習得」、単元後半に「活用・探究」を意図的に配置した。それは、単元の前半で身に付けさせたい技能を習得した後に、それを試したり新しい動きへと発展したりする学習課題を設けた方が、児童の運動課題の解決につなげやすいと考えたからである。また、本実践の習得する技能を、「高く・遠く・リズムカルに跳ぶことができる」とした。それを習得する場面では、「上方に跳ぶ」「前方に跳ぶ」「連続して跳ぶ」ことができる場の設定を工夫して学習を進めていった。

	1	2	3	4	5	6
主なねらい	・学習の進め方を理解しよう	・いろいろな場でいろいろな跳び方を楽しもう。		・コースを工夫して、いろいろなとびっこ遊びをしよう。		とびっこ大冒険をしよう
核となる学習内容	・学習の進め方	・両足跳び ・片足跳び	・片足跳び ・助走をつけての踏み切り	・とびっこ遊びの場の工夫 ・高く、遠く、リズムカルなジャンプ		身につけた技能でとびっこ遊びを楽しむ。
主な学習活動	オリエンテーション	【活動１】チャレンジタイム ○いろいろな場でとびっこ遊びに挑戦しよう。 ・ゴムとび ・わとび ・しまとび ・ケンパーとび		【活動２】パワーアップタイム ○グループでいろいろなとびっこコースに挑戦しよう。 ・かわとび ・れんぞくゴムとび ・混合コース		とびっこ大冒険 まとめ
		ふり回り				

(3) 効果的な指導

① 擬音語を用いた動きのイメージづくり

「擬音語」を手がかりにして運動課題を持たせ、そのイメージに合った動きを行うことで、身に付けさせたい技能の習得を図るようにした。

擬音語は、教師側からではなく、児童が活動する中で出てきた音を取り上げ、跳ぶ動きをイメージしやすいようにしたり、リズムカルに跳んだりできるようにした。

② 児童の意欲をもたせる教具の工夫

冒険には危険がつきもの。そこで、各コースに動物（ぬいぐるみなど）たちを配置したり、ゴム跳びにはすずをつけたりして、活動に意欲をもたせる工夫をした。
（カメ（ぬいぐるみ）→カメに当たらないように跳ぶ設定）

③ アドバイスボード

学習中に児童から出たイメージしやすい音やよい動きにつながる声かけの言葉をカードにし、「アドバイスボード」に掲示して学習を進めた。また、動きの課題とアドバイスを対応させながら例示することで、自分がめざす動きや友達にかける言葉の参考になった。



とびっこコースの擬音語



(4) 言語活動の充実

学習活動の終わりにふり返りの場を設定し、ふり返り板（横軸が技能面、縦軸が情意面）を活用した。拡大板を使用し、他グループの児童にも見えやすいように配慮した。自分のめあての達成度（自己評価）が明確化されるとともに、同じグループの友達や他グループのふり返り（相互評価）も行うことができた。



3. 成果 (○) と課題 (☆)

○児童の課題や実態をふまえ、単元前半に付けたい力（技能）を身に付ける時間をまとめて設けたことにより、教師が意図する動きを身に付けることができるようになり、単元後半で「もっと遠くに、もっと高く跳びたい」という意欲が高まり、主体的に活動する姿が増えた。

○児童から「ギャッ ビューン」などの「擬音語」がたくさん出てきた。児童がその動きに合わせて発案した言葉は、跳んだり、着地したりするイメージやタイミングを容易にし、それが技能の習得にもつながった。

☆児童が擬音を用いた動きのイメージ作りはとても効果があったが、児童にコース作りをまかせたため、課題設定が高くなりすぎた。2年生という発達段階から考えると、運動を行う時間、場の広さや数などに検討の余地があり、教師の言葉かけの工夫や場作りの多様性を考えていきたい。

☆低学年の学習において、本実践では、より遠くに、より高く跳ぶための動きを考え、その動きを使った場作りの工夫として「活用」をとらえたが、今後さらに研究を深めていく必要がある。